

朝鮮語

一 前 史

1 対馬における朝鮮通詞養成

東京外国語学校に朝鮮語学科が設置されたのは一八八〇（明治十三）年のことである。「文部省第八年報」に「蓋シ明治九年修好条規締約ノ挙アリシヨリ以来隣交ノ日ニ密ナルニ随ヒ其語学ヲ修ムルハ固ヨリ欠ク可カラサルヲ以テナリ」とあるように、七六年に締結された日朝修好条規がその背景にあつた。しかし、周知のとおり近世には徳川幕府と李氏朝鮮王朝の間に国交関係があり、朝鮮に近い対馬藩が家役としてその外交実務を担つていた。したがつて、近世における朝鮮通詞（朝鮮語通訳）は、もっぱら対馬藩において養成されていた。朝鮮語学科は、遠くは対馬の朝鮮通詞養成に淵源をもつ。

一 前 史
対馬藩では朝鮮通信使が来航すると毎回五〇人内外の朝鮮通詞を動員した。かれらは「六十人」と呼ばれる朝鮮との貿易を行う特権商人だつたという。この特権商人たちは親・親類から朝鮮語の手ほどきを受け、やがて親とともに現在の釜山市内にあつた倭館（一六七三年まで豆毛浦、以後草梁）に渡つて語学力を身につけた。朝鮮貿易のために

朝鮮語を習得した商人が、藩の御用によって通詞職を引き受けるという通詞動員体制が取られていたのである。対馬藩は一六八三（天和三）年以後、専門の通詞職を任用し始めたが、対馬の朝鮮貿易は十八世紀に入る頃から衰退しはじめた。それが商人たちの朝鮮語学習熱にも水をさすことになり、通詞後継者の保持が危ぶまれるようになる。このような状況に危機を感じ、通詞の改革を唱えたのが雨森芳洲であった。

江戸で木下順庵に学んだ芳洲は、一六八九（元禄二）年に順庵の推挙で対馬藩のお抱え儒者となり、その後日朝外交に深く関わっていく。芳洲自身すでに長崎で中国語を身につけていたのだが、一七〇三年と〇五年に倭館に渡って朝鮮語を学習し、『交隣須知』などの朝鮮語教科書の編纂に関与した。その芳洲が一七二〇年から二度にわたって通詞養成計画案を藩に提出し、藩が積極的に通詞を養成すべきことを主張した。その主張は藩に受け入れられ、対馬藩は二七年に通詞養成所を開設する。つまり「六十人」の子弟に対馬で丸三年朝鮮語を稽古させ、優秀な者は本人の希望により倭館に留学させるというものである。二七年から三年間と三一年から三年間の二期の朝鮮語稽古生四三人のうち、一六人が倭館渡航を許可され、うち七人が通詞の専門職である通詞中になったという。

通詞中は大通詞・本通詞・稽古通詞から編制され、一七四二年からは五人通詞（六三年以後は八人通詞と呼ばれることもあった）が定着した。通詞中の勤務先は府中（厳原）・長崎・倭館で、長崎には一人、倭館には二人の勤番通詞が置かれていた。一七六四年の朝鮮通信使来航の時には、大通詞二人、本通詞四人、稽古通詞三人、八人通詞八人の総勢一七人の通詞中がいたという。

対馬藩の通詞養成は、その後明治初年まで継承されていった。当時の朝鮮通詞養成の様子をうかがわせる史料が、対馬歴史民俗資料館所蔵の『韓語稽古規則』（年代不明）である。これによると、毎日午前六時頃から九時頃まで五人通詞や稽古生らが「指南役」から稽古を受け、毎月二・五・八の日に総監督の「頭役」立ち会いのもと暗誦を中心

とした試験を受けていた。「韓語集詞」修了程度の者が藩から扶持米を受ける稽古生、「交隣須知」修了程度の者が五人通詞、「隣語大方」修了程度の者が稽古通詞という目安で到達度が計られていた（対馬藩の朝鮮通詞養成については、文献②③参照）。

2 明治維新と朝鮮通詞

書契問題と日朝関係の停頓

明治維新後、幕府から外交権を接収した明治維新政府は、対馬藩に従来どおり対朝鮮外交実務を家役として認め、一八六八（明治元）年十二月、対馬藩主宗義達を通じて朝鮮に王政復古の通告をしようとした。しかし、朝鮮派遣使節が持参した書契（外交文書）に「皇」「勅」などの文字が使用されていたこと、従来の図書（朝鮮から与えられた印）を廃止して新印が押されていたこと、宗氏の官位が昇進されていたことなど、それまでの外交慣例に反するとして朝鮮側はこれの受理を拒否した。この書契問題を契機に、日朝関係は停頓することとなる。

一方、対馬藩は六九年の版籍奉還で厳原藩となり、七一年七月の廃藩置県で厳原県となった。さらに厳原県は同年九月に伊万里県と合併、翌七二年に伊万里県が佐賀県に改称するとともに対馬は佐賀県の管轄となり、つづいて同年八月には長崎県に編制替えとなった。七〇年に厳原藩士を仮称した外務省調査員を草梁倭館に派遣していた政府は、さらに廃藩置県によって宗氏の家役を接収して対朝鮮外交を直接掌握することとなった。こうして政府は、七二年九月、草梁倭館を接収して「大日本公館」とし、翌七三年四月には外務省七等出仕広津弘信を「朝鮮国在勤」として着任させ、倭館館司深見正景を外務省一三等出仕に改補して厳原に帰還させた（文献⑨）。政府による対朝鮮外交の直

接掌握にともない、それまで家役の一環として対馬（厳原）藩が担ってきた朝鮮通詞養成も、外務省が管轄することになる。それが次にみる厳原の韓語学所である。

厳原韓語学所

廃藩置県後の七二年、対馬の朝鮮通詞の処遇が問題になった。藩に登用されていた通詞中は廃藩置県によって佐賀県士族となったが、その他の市籍の通詞の俸給は歳遣船による朝鮮貿易の利益から支給されていた。ところが倭館の外務省接収によって歳遣船が廃止されたため、かれらへの俸給支払いが困難になったのである。対馬から対策を求められた外務省朝鮮事務課は、同年七月、かれらのうち有用なものを外務省に出仕させて見習いをさせ、かたわら外務省の「漢語学校」に「韓語学」を附設して学ばせてはどうかという案を出した。これに対して外務省は、当初倭館での朝鮮語教育を計画した。

その後の議論については不明であるが、結局は同年八月二十五日に厳原に年間三〇〇円の予算で韓語学所を開設する旨、外務卿副島種臣から正院に伺いが出され（史料①第四卷）、十月二十五日に厳原の光清寺の本堂を教場として韓語学所が開設された（以下、厳原韓語学所については、文献⑦⑭、史料①の第四卷から第六卷参照）。

韓語学所の規定によると、授業は毎日午前八時から午後三時まで、毎月一と六の日が休日、十の日の午前九時から一〇時までが試験であった。それ以前の通詞養成所では、授業時間は「手習二かよひ候支二」ならぬようにと午前中には終るように配慮されて「おり、それは先にみたように明治初年まで変わらなかったが（文献②③）、ここで初めて専門の朝鮮語教育機関の様相を整えることになったのである。総監督の督長には元倭館館主（司）で外務省厳原出張所の深見正景が就き、教授には荒川金助（徳滋）、助教には住永友輔が就いた。



現在の光清寺

有用な者として選抜され、韓語学所の生徒となった朝鮮通詞の子弟は、総勢三五人であった。生徒たちは飲酒が厳禁され、朝鮮の漂流民が漂着した場合、教授とともに事情聴取・通訳・送還をするという、かつての勤番通詞の任務が課せられていた。等級は上等・中等・下等の三等で、上等・中等はそれぞれ一級・二級に分けられ、下等は一級・

二級・初級・等外一級に分けられた。その下に員外生徒があり三等と員外の間に進退は、毎月十・五の日計六回の試験によって決定された。

ところが韓語学所は、日朝外交再開の目処もつかない上に、「寄留生徒神妙勤励ノ処多分ハ貧困差迫リ候者ニテ苦学ノ態不忍傍観候」というような状況で、生徒が勉学の意欲を喪失しかねない有様であった。このため、七三年四月二十八日、草梁公館の広津弘信は外務省に、このまま厳原で朝鮮語を教えても「同処ニテハ兎角惰弱ニ流レ」やすく、いざという時に朝鮮通詞が役に立たない恐れがあるので、韓語学所生徒の内から一〇名を選び、韓語学所予算三〇〇円を草梁公館に移して現地研修させてはどうかという、厳原韓語学所廃止案を提出した。

そうして、外務少輔上野景範が五月二十九日付で正院に、厳原韓語学所を廃止して草梁公館に稽古通詞を派遣して修学させる旨、上申した。この上申書では、廃止の理由が前年八月の「学制」と

の関連で述べられている。「学制」に続く七三年五月五日付外務省宛太政官達で、外務省語学所は「文部省へ可引渡事」となり、さらに五月十八日付文部省布達第七三号で「外務省附属外国語学所今般当省所轄ニ相成候條此段相達候」となって(文献⑧)、十一月四日に外務省独魯漢語学所と開成学校語学生徒を併せて東京外国語学校が設立される。上申書によると、「今度学校ノ向ハ総テ文部省ノ所轄ニ属」することとなったため、韓語学所も「同様同省へ可引渡筈」である。しかし、「此末文部省ニテ引継建設候トモ一ニノ官員特ニ差下シ置候訳ニモ相成間敷去迎此儘土着ノ教官ニ打任セ置候テハ必ラス中廃ニ可及」と、朝鮮語に関しては文部省管轄下での教授がまだ不可能であり、かといってそのまま対馬に朝鮮語教育を任せておく訳にもいかない。そこで、韓語学所は廃止して生徒から稽古通詞を選抜し、草梁公館に派遣しようというのである。その後一〇人の稽古通詞が選抜されて草梁に渡り、厳原の韓語学所は開設からわずか一年で廃止されることになった。

草梁館語学所

対馬で選抜された一〇人の稽古通詞は、途中風波で船が沈没するアクシデントがあったが、七三年十月二十二日に草梁に到着し、草梁館語学所が開始した(以下、草梁館語学所については、文献⑦⑭、史料①の第七巻から第八巻参照)。なお、予算は当初厳原韓語学所の三〇〇円を引き継ぐとなっていたが、結局は草梁公館の予算五、〇〇〇円から支弁されることになった。督長に奥義制、別監に山之城祐長、教授に厳原韓語学所教授であった荒川徳滋が就き、助教には東田伊良と住永辰妥(友輔)が就いた。稽古通詞の等級は六級で、第一級・二級・六級が欠、第三級・四級に各三人、第五級に四人であった。

授業時間は韓語学所と同様午前九時から午後三時で、毎月一と六の日が休日であったが、毎月十の日の試験は九時

から一〇時までが暗誦、一〇時から一二時までが編文・会話となった。試験日には督長が立ち会ったが、總監督が立ち会って行う口頭試験によって進級が判定されるというのは、近世以来の方法である。教科書は「交隣須知」「隣語大方」を骨子に、「常談」「隣語大方」の続編のようなもので紙数一八枚、「講話」（日朝官吏が交換する挨拶の練習書で紙数二二枚）によって対話・訳述の練習および輪講・輪読を行い、「崔忠伝」「林慶業伝」「淑香伝」「春香伝」「玉嬌梨」「壬辰録」などによって朝鮮の風習を学んで翻訳の参考としたという。こうした教授法も近世以来のやり方を踏襲したものだと思われる。なお、金守喜キムスヒという朝鮮人教師もいたという。

ところが、開設から半年ほどの七四年春、語学所内に問題が生じた。まず、荒川徳滋が「旧来大酒醉狂ノ癖アリ」という理由で教授を免官された。さらに、荒川の素行が問題になった頃、稽古通詞一〇人の内六人が家禄奉還のため三〇日の期限内で帰省したまま戻らなくなってしまったのである。その背景には、稽古通詞の経済問題、および依然とした日朝関係の停頓によって将来の活躍の希望が持てないという状況があったと思われる。

稽古通詞には等級に従って二円から三円の学資が支給されていたが、「式円位ノ学料ニテ自費自賄ハ逆モ出来ルモノニモナシ」というように、かれらは経済的に困窮しており、そこに家禄奉還となったため「家計ノ為メ稽古通詞被免度義願出」ということになったのである。また、稽古通詞たちが草梁に到着するとソウルでは「此生徒ハ専ラ天守テウ（主力）学ヲ学ヒ居候ト申事朝廷へ達シ且洋人モ館中ニ入込居候」などと疑いがもたれ、一方日本では征韓論が湧き起こり「虚実相交エテ風聞モアルヘキコトナシハ辺陲ノ者ハ真意何処ニ在ルヲ弁スル能ハズ此無益ノ学ニ従事シテ後來必ス御国用トナルヘキヤ否ヤ」疑わざるをえなかった。こうした事態に対して興義制は、欠員を補充すること、稽古通詞は満三年あるいは成業まで帰省を許さないこと、学資は一律三元とすることなどの対応を図ったが、結局帰省した稽古通詞は戻らず、欠員も補充されなかった。そのため、以後稽古通詞の定員は四人のままとなる。

その一方で日朝間の事態は転換しつつあった。七三年十二月、強硬な鎖国攘夷政策をとっていた大院君政權が倒れて国王高宗の親政がはじまり、王妃閔氏の一族が政權の中樞を占める閔氏政權が成立した。日本側はこれを好機ととらえ、また朝鮮側にも開国論が台頭し、両国間の交渉が再開されることになった。七五年二月、森山茂・広津弘信らが釜山に派遣されて朝鮮側に外務卿の書契謄本を手渡したが、しかしここでも「大日本」「皇上」の字句が使用されていることなどが朝鮮側で問題となり、交渉はまたも暗礁に乗り上げた。森山らは政府に軍艦の派遣を要請し、九月には軍艦雲揚が江華島に侵入、朝鮮側から砲撃を受けて応戦した。そうして翌七六年二月に特命全權弁理大臣黒田清隆・特命副全權弁理大臣井上馨らを江華島に派遣して、日朝修好条規を締結させたのである。

この黒田使節には草梁館語学所教授の浦瀬裕や先に教授を免官された荒川徳滋、稽古通詞の阿比留祐作・中村庄次郎、さらに対馬に帰省したまま戻らなかつた元稽古通詞二人が同行している。同年五月には日朝修好条規締結にともない朝鮮から修信使金綺秀一行が日本を訪れるが、その時にも浦瀬裕・荒川徳滋・中野許太郎ら草梁公館書記生とともに、当初稽古通詞として草梁に派遣された一〇人全員と、「準語学生」の住永琇三が通訳として同伴出京を命じられている(史料②)。前途に絶望していた稽古通詞たちが、一変活躍の場を与えられたのである。日朝修好条規の締結によって草梁公館は領事館となったが、語学所は定員を四人としたまま存続した。

二 東京外国語学校の建学と朝鮮語学科設置

1 朝鮮語学科設置

朝鮮語学科設置の背景

東京外国語学校に朝鮮語学科が設置されるのは、先に述べたとおり一八八〇（明治十三）年である。八五年に東京外国語学校は東京商業学校に合併・吸収されるが、それまでの東京外国語学校を旧外語と呼ぶ（以下、旧外語朝鮮語学科については主に文献⑭・史料③参照）。

朝鮮語学科設置に関する最初の記録は、七九年十月の外務省朝鮮管理官前田献吉の意見書である。

東京外国語学校内ニ韓語学ノ一科ヲ設ラレ普ク有志者ヲ募集シ其教員ハ韓語卒業ノ者ヲ撰ヒ教導セシメ傍ラ本省ノ庶務ヲ見習セルニ於テハ公務ヲ処裁調理スルノ法ヲ覚知スルノミナラス殊ニ滞京中韓語忘失ノ予防トモ可相成歟而シテ往々ハ人物ヲシテ管理官ヲ任スルヲ目的トス（史料③）

ここでは稽古通詞出身者に朝鮮語教師と外務省での見習いをさせることによって、将来の人材を養成しようという目的が示されている。この前提となっているのが、首都への外交使節相互派遣を規定した日朝修好条規第二款であった。朝鮮側は日本の外交使節のソウル常駐を拒んだが、日本側の意図は、対馬・釜山の外交ルートに代えて東京―ソウルのルートを確立することによって近世の日朝外交関係を完全に清算し、さらに朝鮮側の反対を押し切ってソウル

での公使館開設を表現しようとするものであった。したがって、対馬・釜山の朝鮮通詞・稽古通詞も東京に移して新たな外交ルートに合わせた事務を身につけさせ、さらに東京滞在中の語学力維持の方法を講じておく必要があったのである。

続いて外務卿井上馨は、一月二十日に文部卿寺島宗則宛に次のような書簡を出した。

東京外国語学校内ニ朝鮮語学之一科ヲ被設度義ニ付先般前田管理官ヨリ別紙之通り見込案差出候然者同国之儀ハ追々開港場モ増加致シ且交際之道モ益親睦ニ帰セサル可カラサレハ今日同国語学之一科ヲ開クハ実ニ必要ト存候委細ハ管理官ヨリ御引会ニ及候間篤々御協議相成度此段及御照会候也（史料③）

ここでは朝鮮語学科設置の理由として、まず「追々開港場モ増加致シ」というように、日朝修好条規で規定された朝鮮の開港場の問題が挙げられている。日本政府は、修好条規の第四款および第五款にもとづいて、既得権とした釜山での通商の他に二港の開港を朝鮮側に要求していた。このうち元山の開港が、前年の七九年に妥結していた。さらに日本政府は八〇年四月に花房義質を弁理公使に昇格させてソウルに派遣し、残り一港の仁川開港問題と、公使のソウル常駐の問題を解決させようとするのである。このうち仁川開港は交渉が妥結しなかったが、公使常駐問題はこの年十二月、朝鮮側にソウルでの日本公使館開設を黙認させて日本側の要求を押し通すことになる。「交際之道モ」云々の背景には、こうした外務省の思惑が反映していると推測される。

朝鮮語学科の設置

以上でみた朝鮮語学科設置に関する外務省の申し出に、文部省も積極的に応じている。一月二十三日付外務卿井上

警苑文部卿寺島宗則書簡には、

朝鮮語学之一科ヲ開クヘキ儀ニ付テハ篤ト御協議被及度御見込ヲ以テ御照会之趣領承候右ハ御見込之通該學之今日ニ必要タル儀ハ固ヨリ御用意ニ有之就ハ其方法ノ宜キヲ得候上ハ東京外国語学校内ニ韓語学ノ一科ヲ開設候様致度ト相考候尤右件着手ニ付巨額ノ金円ヲ要スルカ如キハ当省財務上ニ於テ即今多少之不都合モ有之候ヘトモ篤ト御協議之末簡便之良規相立テ成功ヲ謀リ度ト思惟候猶委曲之議ハ其辺主任ノ者ヨリ管理官ヘ商議及フ可クト存候先此段及御回答候也(史料③)

とある。さらに同日付で主任の学務局長九鬼隆一から朝鮮管理官前田猷吉宛に、生徒は官費生とすること、生徒増員に依じて宿舍を増築すること、教員には稽古通詞出身者および外務省通弁官を雇用すること、陸海軍の官費生も受け入れること、定員は二〇人以内とすることなどの具体案が提示された。

この後、外務省は陸軍省・海軍省とも協議の上、三月二十二日付で外務卿井上馨から文部卿河野敏謙宛に次のような書簡を出した。

東京外国語学校内へ朝鮮語学之一科被設度義ニ付先般来及御照会候未陸海軍省へモ生徒差出方委詳及協議候処陸軍二名海軍五名当省ヨリ拾名ニ該ル生徒へノ費用可差出苦ニ有之就テハ当省生徒十名之内四名ハ別記之者差出度余ノ人員ハ貴省ニ於テ相当之者御人撰相成様致度將又右語学教師之義ハ当分当省八等属荒川徳滋へ兼勤為致本人給料ハ当省ヨリ支給可致候得共別記生徒之内川上立一郎高雄謙三義ハ兼テ該語学修業粗熟之者ニ付助教兼務為致当省ヨリ支給スヘキ生徒費之外三川上へ屯月拾円高雄へ一月七円之給料貴省ヨリ御支給有之様致度右ニテ御異見無之候ハ、早々設立之御手順御運相成度此段及御照会候也(史料③)

これに対して河野敏謙は三月三十日に「別段異存無し」と回答し、当初の案より五名多い二五名の生徒受け入れを決定するのである。

一方、朝鮮語学科設置にともない草梁館語学所は廃止されることになり、稽古通詞の川上立一郎・高雄謙三・国分象太郎・梅村美雪の四人は朝鮮語学科に編入することになった。そのうち相当の朝鮮語学力を有する川上と高雄に、助教兼務としてそれぞれ一〇円と七円の月給を支給することになったのは、先の引用文のとおりである。

東京外国語学校朝鮮語学科は、遠くは雨森芳洲の朝鮮通詞養成計画に淵源をもち、直接的には厳原韓語学所以来の外務省の語学所を引き継いで設置されたということができるのである。

2 旧外語朝鮮語学科

生徒と教課過程

八〇年七月、朝鮮語生徒の募集と試験が行われ、外務省所属官費生五人・陸軍省所属官費生二人・海軍省所属官費生五人・東京外国語学校所属給費生八人・自費生四人の入学が許可され、先の稽古通詞四人と稽古通詞出身で領事館勤務の塩川市太郎が加わり、定員二五人に自費生四人を加えた総勢二九人の生徒によって朝鮮語学科の授業がはじまった。なお、東京商業学校との合併まで、これ以外の生徒は募集されていない。

官費生および給費生の支給額は、官費生のうち稽古通詞出身者は下等第二級以上五円五〇銭、下等第三級以下五円三五銭、新規の官費生および給費生は下等第二級以上五円、下等第三級以下四円であった。生徒たちは校舎の隣に増築された寄宿舎に入った。学課課程は表1のとおりであるが、八二年からは二期制を改め第一年・第二年……第五年と進むようになった。稽古通詞出身の川上立一郎は下等第二級、高雄謙三・国分象太郎・塩川市太郎は下等第三級、林武之助（梅村美雪改名）は下等第四級からはじまった。教科書・教授法ともおおむね草梁館語学所以前のものを踏

二 東京外国語学校の建学と朝鮮語学科設置

表1 旧外語朝鮮語学科(1880年)の教科課程

体操	国書	漢書	幾何	代数	算術	記簿法	地理	歴史	典書	作文	翻訳	話稿	対話	暗誦	説法	授語	授音	習字	第一等語学			
																			第一期	第二期		
3	6				3											単語8	諺文9	諺文3	第一期 第六級	第一等語学		
3	6				3											「交隣須知」3	「交隣須知」4	諺文2	第二期 第五級			
3	6				3							3	「口授」3			「隣語大方」3	「隣語大方」4	「孟子諺解」3	楷書3	第一期 第四級	第二等語学	
3	6				3							5	「口授」3			「隣語大方」1	「隣語大方」2	「淑香伝」4	楷書2	第二期 第三級		
3	6				3					2	2	3	「口授」3					「五箇行実」4	「善感義録」4	「解」6	第一期 第二級	第三等語学
3	6				3					3	2	3	「口授」3					「九雲夢」4	「氏商征記」4	「解」5	第二期 第一級	
3	3	3	2	3		1				「大典会通」2	2	2	「口授」3					「張敬伝」3	「五経」3		第一期 第四級	第四等語学
3	3	3	3	2		1				「通文館志」2	2	2	「口授」4					「玉嬌梨」3	「五経」2		第二期 第三級	
3	3	3	3	2		1		1			3	2	「口授」4					「崔忠伝」3	「五経」2		第一期 第二級	第五等語学
3	3	3	3	3					1		4	2	「口授」4								「八山輿地勝覽」2	

出典：『東京外国語学校一覽』1880、1881年。数字は1週当たり時間、「」は教科書名。

表2 旧外語教員一覧

年度	教員	兼嘱教員
1880		阿比留祐作
1881		住永 秀三
1882	孫鵬九	住永 秀三
1883	李樹廷	住永 秀三
1884	李樹廷	住永 秀三

出典：「東京外国語学校一覧」各年度。

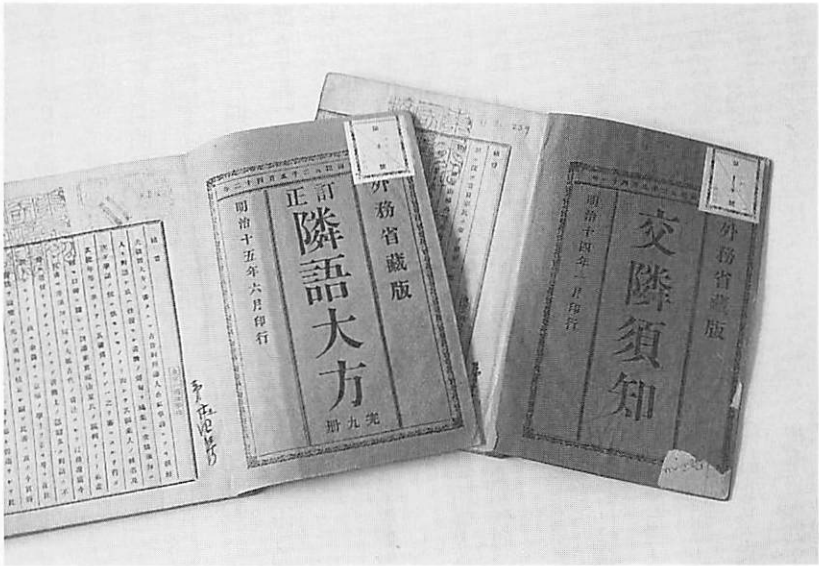
襲しており、朝鮮版四書五経の教科書も釜山領事館から文部省に移管されたものだった。このため「東京外国語学校一覧」の各年度には、「朝鮮語学ハ毎課妥当ノ教科書ヲ穫ルニ由ナシ故ニ此教科細目ノ如キハ目下仮定ノモノニ係ル」と書き添えられている。

教師陣の構成

旧外語朝鮮語学科で教えた教師は、表2のとおりである。先の三月二十二日付河野敏謙宛井上馨書簡では荒川徳滋の名が挙がっていたが、実際には阿比留祐作が就任し、阿比留の釜山転勤により翌年四月から住永秀三に代わった。兩人とも外務省御用掛の兼嘱で、阿比留は畿原韓語学所生徒から草梁館稽古通詞となり、七六年の江華島談判と金綺秀修信使来航の際には通訳として活躍した経験をもつ。住永も金綺秀修信使来航の時に「準語学生」として通訳を務めたことは先に見たとおりである。一方、専任教員は八二年に孫鵬九ソンペングが就任するまでいないが、孫以前に朝鮮語学科で教授した朝鮮人がいたことを示唆する史料が二件ある。一つは先に引用した三月二十二日付河野敏謙宛井上馨書簡での付け札である。

本文之外朝鮮人東仁ナル者兼テ東京本願寺へ寄留致居候ニ付語学教師ニ雇入度之処此者義ハ公然教師へ雇入難キ事情有之ニ付本文川上高雄兩人ト東仁へ示談為致兩人助教給料之内ヨリ一月六円（川上ヨリ四円高雄ヨリ弍円——原文）ヲ東仁へ差遣内教師ニ頼入為致度文部省見込ニ有之候（史料③）

二 東京外国語学校の建学と朝鮮語学科設置



旧外語教科書として使用された『交隣須知』、『隣語大方』（東京外国語大学図書館蔵）

この「朝鮮人東仁」とは、開化僧として知られる李東仁^{トシジン}のことである。李は七九年に開化派の金玉均^{キムヨウキョウ}らの命で日本に密航、その後京都東本願寺と浅草の東京別院に留まりながら朝野の政治家や東京駐在各国外交使節らと接触している。八〇年に金弘集^{キムホンジツ}修信使一行とともに帰国して国王の信任を得るが、八一年初、再度の日本訪問から帰国した後忽然と姿を消した。一説には大院君派によつて暗殺されたといわれるが、真相はわかっていない（文献^⑬）。その李東仁に教師を要請したというのが、密航の身であるため「公然教師へ雇入難キ事情」があつたのである。ただし、当時の外国教員の月給は一〇〇円から三〇〇円程度で、助教の月給から六円を支払うといふのでは、通常の外国教員並に教授させようとしたと考えるににくい。おそらく口頭試験の試験官などとして臨時に雇用しようとしたのではないかと思われる。李の東京滞在期間は長くなかつたが、そうした形態で李が朝鮮語教育に携わつた可能性は否定できない。

もう一件は、海軍省官費生だつた大友歌次の回顧であ

る。大友は、「当時雇教官として迎へられたる朝鮮人の中に卓挺植（植カ）なる偉人」がいたが、「其の豊かなる給与を受け居りし爲にも因るものなる可きも、学校より月額二百円余の支給を一身の束縛を免かれむ爲めなりとの辞柄により固辞して受けざりし程の高潔なる人なりしなり、日本に來りて日本式に姓名を名乗りて朝野覚達と自称せし程の所謂新人開明の人物たりしなり」（文献⑪）と述べている。

卓挺植^{タクチョンシク}もまた僧で、金玉均らと氣脈が通じ八〇年に日本に密航、東京で李東仁と合流した。卓は都合三回日本を訪れ、八四年に神戸で客死したという（文献⑫）。卓挺植あるいは朝野覚達の名は「東京外国語学校一覽」にも『文部省年報』にも現われないが、しかし大友が全くの記憶違いで右のように記述したとは考えにくい。これを裏付けるものとして、史料⑬の二つの記事がある。

東京外国語学校於テ朝鮮人卓挺植へ朝鮮語学取調等之事業去六月廿六日ヨリ当分之間及依嘱候此段及御通知候也（一八八一年七月一日付官学第四八〇号）

東京外国語学校於テ朝鮮語学取調等之事業朝鮮人卓挺植へ依嘱致シ居候処同人辞嘱申出候ニ付更ニ同国人孫鵬九へ本月廿八日ヨリ当分之間右事業依嘱候条此段及御通知候也（十月三十一日付専学第八四六号）

ここから、卓が八一年六月から十月頃まで東京外国語学校で「朝鮮語学取調等之事業」に携わったと推測できる。密航によって渡日した卓も正式に雇用するわけにはいかなかったのだが、大友の回顧と合わせると、卓の場合は依嘱という形で招請して朝鮮語を教授させたのだと考えられよう。

正式の教師として初めて現れる孫鵬九は、朝鮮政府が八一年に派遣した日本視察団（「紳士遊覧団」と呼ばれる）で朝士金鏞元^{キムシウワン}に随行した人物である（文献⑬）。史料⑭によれば、日本視察中に孫は工部省品川工作分局で硝子製造術を研究することになったようだが、視察日程終了後は東京大学での「医学研究」を希望した。しかし日本語が不十

分なため、東京大学総理加藤弘之から日本語熟達の上翌年の生徒募集に応募するよう勧められ、孫は東京大学入学を一時断念した。この件に関して外務省と東京大学の間で公文がやり取りされたのが同年九月のことであるから、先の東京外国語学校の「朝鮮語学取調等之事業」が依嘱されたのは、その直後のことになる。結局孫は次の東京大学の生徒募集を待たずに、八二年三月一日付で月給一〇〇円で東京外国語学校教員の雇用契約を結んだ（『文部省第十年報明治十五年』二）。孫は約一年半東京外国語学校で教えた後辞職し、「其膺任中授業勉勵ノ効」によって五〇円が贈られた。

孫の後任となったのが、八二年九月に朝鮮政府の実力者閔泳翊（閔妃の甥）の随員として来日した李樹廷である。月給一〇〇円、期限二年で東京外国語学校教員の雇用契約を結んだのは八三年八月九日であるから（『文部省第十一年報明治十六年』二）、来日から約一年の間があることになるが、李はその間に津田仙と接触してキリスト教を信じるようになり、三月に洗礼を受けた。その後マルコによる福音書を翻訳、八五年に「懸吐漢韓新約聖書」として横浜で刊行しており、李はこの最初の朝鮮語訳聖書で知られる人物である。李はまた教員在職中に『朝鮮日本善隣互話』（基齋蔵版、一八八四年）を刊行しているが、これは東京外国語学校の教科書としても使用されたという。八五年十月二十三日に病気を理由に辞職した李は、孫と同様五〇円を贈られ翌八六年五月に帰国したが、甲申政変以来日本留學生や亡命者に警戒を強めていた朝鮮政府によって処刑された（文献⑯）。

朝鮮外交使節と旧外語朝鮮語学科

一八八〇年代に入ると、朝鮮政府は対欧米開国と開化政策を進めていくことになる。八一年には新たな外交部署として統理機務衙門を設置し、また日本人教官を招聘して洋式軍隊を編制した。さらに日本に視察団を派遣して明治維

新後の諸施設について報告させ、天津に武器製造技術などを学ばせるための留学生を派遣した。そうして八二年五月にはアメリカと修好通商条約を結ぶ。その過程で台頭してきた金玉均ら開化派も数度にわたって日本を訪れた。そもそも旧外語朝鮮語学科は設置当初から李東仁に接触していたのだが、このように相次いで日本を訪れた朝鮮の要人たちとも関係があった。

朝鮮政府の開国・開化への政策転換の契機になったのが、八〇年八月に日本に派遣された金弘集修信使である。金弘集は東京外国語学校を訪れていないが、国王への復命書では東京外国語学校に朝鮮語学科が設置されていることが報告されている(史料⑤)。孫鵬九が随行してきた八一年の日本視察団では、文部省施設視察を担当した朝士趙準^{チョウジュン}永^{ニヨン}一行が六月十三日に東京外国語学校を視察している(文部省第九年報「一」)。さらに「文部省第十年報」には、翌八二年五月二十七日に金玉均・徐光範^{ソクワンボム}らが訪れたと記されている。ただし琴乘洞^{クムセヨンドン}の「金玉均と日本」(文献②)によれば金玉均一行が東京に到着したのは六月一日であるから、日付が合わないという問題がある。その後、六月六日付で内村良蔵校長から外務大書記官宮本小一宛に、七月初旬に行う予定の第二学期定期試験に「金玉均外名臨場」を協議する書簡が出されている(史料③)。おそらく口頭試験の試験官として招こうとしたのであろうが、実現したかどうかはわからない。

朝鮮からの使節派遣の際には、東京外国語学校の生徒が通訳として動員されている。八一年の日本視察団来航の際には、外務省から稽古通詞出身の川上立一郎・国分象太郎・塩川市太郎を授業の余暇に通訳に囑託したい旨照会があり(史料⑤)、翌八二年一〇月の朴泳孝^{パクヨウキョウ}修信使来航の際には、国分象太郎と塩川市太郎が兼囑教員の住永琇三とともに通訳をつとめ、朴の帰国の際にそれぞれ「尾扇二柄・綿紬三疋」を贈られたことが確認できる(史料⑥)。稽古通詞出身者に「本省ノ庶務ヲ見習セル」という外務省の目的が達成されたといえるわけだが、即戦力たりうる稽古通詞

出身者は、学業不振で退学となった林武之助を除き、開港場の増加などにもない卒業を待たずに公使館員・領事館員として朝鮮に赴任している。

3 旧外語の廃止

旧外語の廃止と日清戦争

最初二九人の朝鮮語学科生徒のうち、一八八四（明治十七）年度に残っていたのは第五年生の一六人であった。八五年七月にはそのうち六人が卒業したが、同年九月に東京外国語学校は所属高等商業学校とともに東京商業学校と合併して東京商業学校となり、この六人が旧外語朝鮮語学科の最初で最後の卒業生となった。東京外国語学校の教科は東京商業学校第三部として踏襲されたが、これも翌八六年に廃止される（東京商業学校は八七年に高等商業学校と改称）。残った一〇人のその後について、詳細はわかっていない。文部省は八六年一月に外務省に対して露・清・朝三か国語の生徒の需用があるか照会したが、その回答は必要な人員が備わっているため予め欠員は期しがたいというものであった（史料④）。朝鮮に関していえば、日本は甲申政変の後、開化派の失脚、英露対立の朝鮮波及などによって、政治的・軍事的に後退することを余儀なくされていた。

こうした状況が一変するのが一八九四（明治二十七年）年の日清戦争であった。一九三二（昭和七）年の『東京外国語学校沿革』で長屋順耳校長は、次のように述べている。

森（有礼——引用者）氏の誤れる英断の酬は九年の後明治二十七年に爆発した所の日清戦争に遺憾なく顕はれたのは遺憾

極らないのである。

いざ戦争が始まつたと云ふ時に支那語、朝鮮語、露西亞語又は英、仏、独に堪能なる人多数を求めたとてさうは問屋で卸さない……加之助けてやつた朝鮮の国内には露西亞が勢力を植え後十年日露の大衝突を見なければならぬ様な原因を作つたのも一は我国人の中露語、朝鮮語に堪能なる人が少なかつたが故である。

このような日清戦争の「反省」のもと、九六年第九帝國議會において、貴族院・衆議院が外国語学校開設を建議する。衆議院の建議によれば、「今や我国八一躍シテ東洋ノ表ニ雄視シ宇内生存競争ノ衝路ニ当ル」ようになったのだから、特に「魯清韓ノ如キハ將來益ノ密接ノ關係ヲ有スルモノニシテ今猶其ノ言語ヲ教授スルノ学校ナク外交モ商業モ殆ト模索以テ之ニ応セムトス樽俎ノ際折衝ノ時麻姑ノ癢ヲ搔クノ快ナキハ豈雄資ノ一大欠点ニアラスヤ」というわけである(文献⑳)。そうして九七年四月、高等商業学校に附属外国語学校が附設され、そこに韓語学科が設置されることになる。これに入る前に、しばらく日清戦争前後の朝鮮について、旧外語朝鮮語学科卒業生六人の一人である鮎貝房之進(槐園)の活動と合わせてみておきたい。東京外国語学校所属給費生だった鮎貝は、周知のとおり後に「雑攷」全九輯などの著作によって朝鮮史・朝鮮語研究者として知られるようになる人物である。

鮎貝房之進と朝鮮

八五年の卒業の後、鮎貝は一時郷里の気仙沼に帰つたが、八七―八八年頃には再び上京して兄で歌人の落合直文の家に寄寓していた。その鮎貝が「折角朝鮮語をやつたのであるから朝鮮に渡つて何かやらうと思つて居たのですが、丁度教育事業をやらなかつたかと思ふ者があり」朝鮮に渡つたのが、「明治二十七年日清戦役の始る少し以前」のことであつた(文献㉑)。教育事業の斡旋をしたのは、朝鮮語学科の同級生だった国分象太郎(公使館通訳生)・大木安之助



42歳当時の鮎貝房之進

(領事館書記生)・塩川市太郎(領事館通訳生)だったという(文献⑫)。
このころ朝鮮半島の南部で甲午農民戦争が勃発、事態の収拾に窮した朝鮮政府は清に軍隊の派遣を要請したが、これに対して日本も朝鮮に出兵した。日本政府は朝鮮の内政改革などを理由に軍隊を駐留させ、七月二十三日に王宮を占領して閔氏政権を打倒、二十五日に清国艦隊を奇襲攻撃して戦闘状態に入る。二十七日には大院君を担ぎ出して金弘集を首班とする親日開化派政府を樹立させた。

先の大友歌次によれば、「氏(鮎貝——引用者)の学問と徳性は氏が韓語を良くすることに より大院君の愛を受くるに至り自由に雲峴宮に出入するを得た」(文献⑪)と、鮎貝は大院君と親交をもっていたという。大院君は九四年末に公使として赴任した井上馨によって再び下野させられるが、すでに矢継ぎ早に内政改革を断行しつつあった開化派政府はさらに改革を推し進めていった。甲午改革と呼ばれるこの改革で外部(外務)大臣を務めた金允植キム・ユンシクとも、鮎

貝は親交を結んでいる。

鮎貝が携わった教育事業とは、具体的には下関条約の直前にソウルで設立された乙未義塾のことである。この学校は私立であったが、実質的に開化派政府の補助金で運営され、日本語と日本語による普通学を教授したという。鮎貝は、落合直文門下で旧知の与謝野鉄幹とともにこの学校で教えたのである(文献⑳)。しかし乙未義塾の開校直後、朝鮮の政情は一変する。その間の有様について、鮎貝は次のように回想している。

所が日清戦役がすみ、三国干渉の問題もあり、朝鮮政府の様子も随分変つて参り、吾々の事業もひどい圧迫やら防害ぼうがいを受ける様になり、一般にも日本排斥の風兆が盛でありました。有名な乙未の事変は丁度二十八年の十月八日に起つたのであります。私も此の事件には関係もいたしましたが、私は領事館の某書記官？（或は堀口領事館補か——原文）と主に聯絡をとつた。……事変後、三浦公使始め広島の獄に収容されましたが、私は皆の勧めで、裁判が終るまで約七か月程木浦に難を避けて居りました。（文献⑩）

三国干渉を機に国王・閔妃が巻き返しを謀り、朝鮮政府の中に排日の氣運が生じてきた。事態を悲観した井上馨は公使を辞任し、代わりに赴任した三浦梧楼関与のもと、日本人浪人らが朝鮮軍人のクーデターを装って閔妃を殺害、大院君を再び担ぎ出した（乙未事変）。事変後成立した親日派政權が三人の朝鮮人を実行犯として裁判にかけ処刑したこともあり、広島に送られた関係者五六人は無罪となったが、朝鮮では日本と親日派政權に対する敵愾心が高まり、翌九六年二月には国王がロシア水兵に保護されてロシア公使館に移るいわゆる俄館播遷事件が起こつて、親日派政權は崩壊、日本の勢力は再び後退することとなった。先の長屋校長の「日露の大衝突を見なければならぬような原因」とは、このような経緯によつてもたらされたのである。

三 新外語の韓語学科

1 教員と生徒の状況

教員の構成

一八九七（明治三十）年四月に高等商業学校に附設された附属外国語学校は、九九年四月に東京外国語学校として独立する。これ以後を新外語と呼ぶが、ここでは学科名は朝鮮語学科ではなく韓語学科であった。国王高宗の皇帝即位とともに朝鮮が国号を大韓と変えるのは九七年十月のことであるから、附属外国語学校の韓語学科設置はそれより早いことになる。韓語学科の教員・生徒、廃止の経緯については、石川遼子（文献⑳）によってすでに大部分明らかになっているが、以下では石川の研究によってその概要を述べながら、いくつかの補足を加えたい。

附属外国語学校および新外語の韓語の教員は表3に示したとおりである。山崎英夫は外務省通訳で、九五年には慶応義塾の朝鮮語学校で教えたことがある。岡倉由三郎は東京帝国大学博言学科を卒業後、朝鮮政府が九一年に設立した官立日語学校の初代教師として、九三年までの二年間お雇い教師をつとめた経験があり（文献㉑）、新外語では東京高等師範学校教授との兼官であった。その後教授は金沢庄三郎と本田存に落ち着く。金沢は東京帝国大学博言学科を卒業後、一八九八年に文部省留学生として朝鮮に留学、一九〇〇年に東京外国語学校教授に任命され、翌〇一年十月に帰国した後教鞭を執った。「日鮮同祖論」に発展する日本語・朝鮮語同系論で知られる金沢については、ここで贅言を要さないだろう。本田は新外語韓語学科の第一回卒業生で卒業後直ちに助教となり、〇三年七月から朝鮮に

表3 新外語教師一覽

年度	教授	外国教師	講師	助教
一九九七	山崎英夫	吳世昌		
一八九八	山崎英夫	吳世昌・柳苾根		
一八九九	山崎英夫	柳苾根・尹致旻・趙慶協		
一九〇〇	山崎英夫	柳苾根・尹致旻・趙慶協		
一九〇一	岡倉由三郎(兼官)	柳苾根・趙慶協		
一九〇二	金沢庄三郎	柳苾根・趙慶協		
一九〇三	金沢庄三郎	柳苾根・趙慶協		本田存
一九〇四	金沢庄三郎・本田存	柳苾根・趙慶協		本田存
一九〇五	金沢庄三郎・本田存	柳苾根・趙慶協		
一九〇六	金沢庄三郎・本田存	柳苾根・延浚		
一九〇七	本田存	柳苾根・延浚	山本恒太郎	
一九〇八	金沢庄三郎・本田存	延浚	山本恒太郎	
一九〇九	金沢庄三郎・本田存	延浚	山本恒太郎・柳苾根	
一九一〇	金沢庄三郎・本田存		山本恒太郎・柳苾根	
一九一一	金沢庄三郎・本田存		山本恒太郎・柳苾根・延浚	
一九一二	金沢庄三郎・本田存		柳苾根・延浚	
一九一三	金沢庄三郎・本田存		柳苾根	
一九一四	金沢庄三郎・本田存		柳苾根・山本恒太郎	
一九一五	金沢庄三郎・本田存		柳苾根	
一九一六	金沢庄三郎・本田存・柳苾根			
一九一七	本田存			
一九一八	本田存			
一九一九				
一九二〇				
一九二一				
一九二二			徐基殷・本田存	

出典：石川遼子『「地と民と語」の相克』83ページ。ただし『東京外国語学校一覽』各年度(1897~1898年は『高等商業学校一覽』)により一部修正。

留学、翌〇四年三月に帰国して教授になった。ちなみに本田は講道館柔道の開祖、日本泳法水府流太田派家元として有名な人物である。〇七年から一二年まで講師をつとめた山本恒太郎も卒業生で、研究生をした後外務省属書記となり講師を兼嘱した。

外国教師

旧外語と異なり、外国教師は初めから置かれている。呉世昌オゼンヤンは、金玉均ら開化派に影響を与えた訳官呉慶錫の息子である。甲午改革で農商工部通信局長などを歴任し、一八九六年の独立協会設立にも関わった。雇用時期に関しては、史料⑦に九七年八月二十日付で加藤増雄弁理公使から外部大臣宛の照会がある。またソウル大学校奎章閣所蔵の「駐日來去案」に九八年九月十二日付で呉は「家患」のため帰国するという報告があるので、九八年度は実際に教えていないと思われる。その後呉は一九〇二年に兪吉濬ユキジュンらのクーデター計画に関連して日本に亡命、亡命中に東学に入信し、一九年の三・一独立運動の時に天道教代表の一人として独立宣言書に署名することになる。柳苾根ユピルグンについては史料⑦に九八年九月五日付で加藤弁理公使から外部大臣署理へ雇用に関する照会がみられるが、それ以前の経歴は不明である。

前の二人が外交上の手続を経て教師に雇用されたのに対して、尹致旰ユンチナと趙慶協チョウキョウヒョウの雇用は性格を異にする。尹致旰は一八九五年に甲午改革の開化派政府によって慶應義塾に派遣された官費留学生で、俄館播遷事件後は日本政府によって準亡命者とみなされていた人物である。辞職・帰国の経緯は不明であるが、保護国の時期には学部学務局長などを歴任し、韓国併合後は朝鮮総督府中枢院賛議となった。趙慶協は趙重応チョウチョウオウの別名である。趙は旧名を重協チョウキョウといい、かつて国禁を犯してシベリアを視察しロシアの脅威を唱えたが、反対派によって流配された経験をもつ。甲午改革の

時に特赦され、外部交渉局長などを歴任するが三国干渉の後失脚、閔妃殺害事件の後に法部刑事局長となり、実行犯裁判の時には特別法院判事を兼任した。このため俄館播遷事件後に免官され国事犯として日本に亡命した。趙が特赦帰国したのは韓国保護国化後の一九〇六年七月であるから、その直前まで教師をしていたことになる。その後趙は、〇七年五月に成立した李完用^{イワンユン}内閣で法部大臣となり、〇八年六月には農商工部大臣となつて韓国併合を迎え、朝鮮貴族令により子爵を授爵されて朝鮮総督府中枢院顧問などを歴任する。残りの延俊^{ヨンジュン}と徐基殷^{ソギイン}については経歴がわからない。なおこのほかに、史料⑦に一八九九年三月二十二日付日本公使から外部大臣宛の、李泳植^{イヨンシク}を附属外国語学校副教師に雇用する旨の照会があり、また「大韓帝国官員履歷書」所載の李の履歷書から、実際に就任したことが確認できる。

生徒の状況

新外語の学課課程は、本科（附属外国語学校では正科）は修業年限三年、別科（附属外国語学校では特別科）、〇四年度から専修科）は夜間で修業年限は二年（附属外国語学校では三年以内）、その他に研究科（二年まで）と選科（今日でいう科目等履修生）は〇一年度から設置され、修業年限一年の速成科は〇六年度と一三年度に設けられた。英・独・仏語学科などが「科学ヲ研究スルノ階梯」とみなされているのに対して、朝鮮語は清語とともに日清戦争後の政治・商業的必要としてみなされたため、韓語学科の学課は会話・作文などの実用語学の習得を目的とするものであった。

附属外国語学校・新外語韓語学科の生徒数の推移については、表4と表5に示したとおりである。開設の意図に反して、新外語初年度の九九年度を除き、当初は入学者・志願者とも一桁と低調であるが、これは先にみた日清戦争後

三 新外語の韓語学科

表5 新外語在学者数

年度	本科	選科	別科／専修科	速成科	研究生	合計
1897	6	0	3	0	0	9
1898	9	0	3	0	0	12
1899	26	0	0	0	0	26
1900	19	0	2	0	0	21
1901	19	1	0	0	0	20
1902	36	0	0	0	6	42
1903	42	2	0	0	7	51
1904	52	3	12	0	3	67
1905	62	2	13	0	9	84
1906	52	1	5	21	0	79
1907	36	1	6	0	0	43
1908	35	2	17	0	0	54
1909	32	1	18	0	0	51
1910	34	1	13	0	0	48
1911	31	3	0	0	0	34
1912	29	0	0	0	0	29
1913	14	0	0	5	0	19
1914	18	0	0	0	0	18
1915	12	0	0	0	0	12
1916	11	0	0	0	0	11
1917	4	0	0	0	0	4
1918	0	0	0	0	0	0
1919	0	0	0	0	0	0
1920	0	0	0	0	0	0
1921	0	0	0	2	0	2
1922	0	0	0	1	0	1
1923	0	0	0	0	0	0

出典：「東京外国語学校一覧」各年度。ただし、1897～1899年度は「高等商業学校一覧」各年度による。なお、高等商業学校附属外国語学校では本科は正科、別科は特別科である。

表4 新外語入学志願者・入学者・卒業者数

年度	本科			専修科		
	志願者	入学者	卒業者	志願者	入学者	修了者
1897	6	6	0	0	3	0
1898	8	3	0	0	3	0
1899	22	16	0	0	8	0
1900	6	0	3	3	3	0
1901	8	6	4	0	0	1
1902	29	27	9	0	0	0
1903	23	23	1	0	0	0
1904	37	27	3	17	11	0
1905	40	29	10	14	7	0
1906	17	12	12	9	4	5
1907	9	7	16	8	6	1
1908	19	13	14	21	15	2
1909	20	16	10	29	14	2
1910	19	14	2	11	9	4
1911	18	12	7	1	1	2
1912	22	14	9	0	0	3
1913	0	0	7	0	0	0
1914	30	10	6	0	0	0
1915	19	4	6	0	0	0
1916	0	0	0	0	0	0
1917	0	0	7	0	0	0
1918	0	0	4	0	0	0
1919	0	0	0	0	0	0
1920	0	0	0	0	0	0
1921	0	0	0	0	0	0
1922	0	0	0	0	0	0
1923	0	0	0	0	0	0
合計	352	329	130	113	84	20

出典：「東京外国語学校一覧」1928年度、351～352ページ。卒業者は年度ではなく卒業した年。

の朝鮮の政情を反映してのものだろう。なお九八年度の生徒名簿にはいきなり正科第二年度に現れる者が二人いるが、九九年度に別科第二年度に入学した上田順一郎（旧名井上安次郎）が「京一商で、第二語学として、亡命客安泳^{アンヨウ}中^{チュウ}氏に韓語を学んだ縁故から、明治三十三年三月同校卒業後東京に出て、母校に入学、別科を経て、三十五年七月選科を卒業した」（文献⑥、ルビは引用者）と述べていることから、既習者には一年級を飛び級させたものと思われる。ただし、こうした例はその後みられない。

当初の志願者の低調を一変させたのが日露戦争である。すでに日英同盟が結ばれた〇二年度から志願者・入学者が増加し、日露戦争中の〇五年度には志願者は四〇人、在校生は各科合わせて八四人を数えるようになる。一方、本科卒業生が〇五年以後二桁となるのは、日露戦争後に卒業生の就職場所が増加したことによると判断できる。教師柳菘根が、附属外国語学校赴任当時「韓語科は学徒が零星で五・六人に過ぎず、その五・六人の間でも私かに韓語は必要がないと、入学したことを後悔する者もい」たのが、日露戦争以後卒業生は皆韓国で就職し、「遊んでいる者がいないというのを英仏独露伊西清語科が聞いて欽羨やまず、現在の必要は韓語だと他科から夜学専修韓語科に入学する者が多」くなったと述べている（文献②）のは、それを裏付けるものである。

2 朝鮮の植民地化と韓語学科

日露戦争と韓語学科

韓語学科は、日露戦争中の一九〇五（明治三十八）年に、二月の繰り上げ卒業で六人、六月の繰り上げ卒業で二人、七月卒業で二人、合計一〇人の本科卒業生を送り出したが、このうち七人が一時研究科に在籍した後、陸・海軍の通

三 新外語の韓語学科

表6 新外語本科卒業生(1900~1910年)の就職場所(1910年12月調査)

朝鮮									間島・安東県	日本	その他の地域	死亡	不明	合計
総督府	地方官庁 (含京城府)	警察	税関	裁判所	銀行会社	実業	その他	合計						
8	21	1	2	2	8	2	2	46	4(4)	6(3)	1(1)	4(2)	23(7)	84

出典：『東京外国語学校朝鮮校友会会報』八。()内の数字は調査時以前に朝鮮で就職したことが確認できる者。

訳になった。また○四年度の研究生三人もこの年、陸・海軍の通訳となっており、研究科はあたかも従軍通訳候補生の待機場所の観を呈した。さらに「公に奉ずるの心より」会社を辞職して従軍通訳となった卒業生も二人いた(文献①)。露西亜語の七六人、清語の六五人に較べて数は少ないが、一人の韓語学科出身者と教授金沢庄三郎が日露戦争の「功」によって叙勲されている。

日露講和にこぎつけた日本は、ロシアから賠償金を獲得できなかったが、韓国に対しては列強の承認を取り付けつつ保護国化を進めていった。日本政府は○五年十一月、特命全權大使伊藤博文を派遣、第二次日韓協約を強要して韓国を保護国とし、翌○六年には韓国統監府と理事庁を設置した。さらに○七年には皇帝高宗を退位させるとともに第三次日韓協約を締結したが、この協約で韓国の政府や裁判所への日本人登用を認めさせたことよって、卒業生の就職先が飛躍的に増加するのである。○八年本科卒業生は一四人のうち一○人が朝鮮に渡っており、そのうち会社員・実業が二人で、残り八人は統監府二人、韓国政府が六人となる(うち五人が観察府・財務署の地方官庁)。さらに従軍通訳として朝鮮に渡っていた者で統監府・韓国政府官僚になった者も多い。かれらの多くは韓国併合後そのまま朝鮮総督府官僚となる。

表6に示したように、韓国併合直後の一○年十二月調査時点で、新外語韓語学科本科卒業生は、総勢八四人のうち四六人が朝鮮で就職していることが確認でき、さらに調査時以前に朝鮮で就職したことが確認できる者を含めると六三人が卒業後朝鮮で就職したことになる。

また、表6の総督府から裁判所は正確にはみな総督府官僚であるが便宜上分けたもので、四六人の朝鮮での就職者のうち総督府官僚が三四人を占め、そのうち二人が地方官庁に勤務していたことがわかる。なお、表には挙げていないが、旧外語朝鮮語学科出身者が一二名、別・専修科および速成科修了生が八人朝鮮で職に就いていることも確認できる。

東京外国語学校韓国校友会

このような朝鮮での就職者の増加によって、一九〇八（明治四十一年）年二月十日ソウルで東京外国語学校韓国校友会の発会式が行われた。会則によると、会は「会員互ニ懇親ヲ篤フシ韓国及之ニ関係スル事情ヲ研究スルヲ目的」とし、会報を毎年二回（〇九年二月の会則改正で三回となり、一二年二月の会則改正で再び二回となった）発行し、春と秋に大会を催し臨時に茶話会を開くとした。会員は「東京外国語学校ニ在校シタル者又ハ之ニ縁故アル者」で、「之ニ縁故アル者」は〇九年二月の会則改正で「特別会員」となり、また「本会ノ主旨ヲ賛成スル者ハ会員ノ推薦（〇九年二月の会則改正で「会長ノ推薦」——引用者）ニヨリ名譽会員タルコトヲ得」た。会員には新旧外語の朝鮮語・韓語学科出身者のみならず他学科の出身者も多く、また孫鵬九以下の元教師も会員となった。特別会員は韓語学科の現職教師、「楽天窟」と呼ばれた熊本県派遣留学生出身者たちで、名譽会員は前間恭作のような他校の出身者もいるが、多くは李完用以下韓国政府の高官・元老である。これはおそらく元教員趙重応の斡旋によるものであろう。会長には国分象太郎（統監府参与官兼秘書官）、幹事には鳥居忠恕（旧外語露語、統監府通訳官）・天野雄之輔（本科明治三十四年卒、三井物産京城支店）・藤戸計太（本科明治三十六年卒、内部大臣官房文書課）・中島直吉（選科明治三十八年修了、志岐組）が選ばれ、一二年二月に鳥居忠恕が黒崎美智雄（旧外語朝鮮語、李王職事務官）に代わった。

四 朝鮮語学科の廃止

会報は一九〇八年九月三十日発行の第一号から一二年一月二十日発行の第一二号まで発行された。内容は主に各大会・茶話会での講演、朝鮮の歴史・言語に関する論稿と資料紹介、会員に地方官が多いことを反映して地方の事情や方言についての報告などである。会報第一二号の「会告」によると、五つの分野で研究委員を選定して以後の研究活動の充実を期し、一二の道と間島・安東県に支部を設置して地方事情の報告を委託することなどを決めたが、その後会報が出ていないことから、校友会自体が事実上解散したと思われる。

四 朝鮮語学科の廃止

1 韓国併合と朝鮮語学科への改称

朝鮮語学科への改称と位置の変更

一九一〇（明治四十三）年八月二十二日、韓国統監寺内正毅は韓国総理大臣李完用との間に「韓国併合ニ関スル条約」を締結し、日本は朝鮮を領有することとなった。そして条約公布日の八月二十九日付勅令第三一八号で「韓国ノ国号ハ之ヲ改メ爾今朝鮮ト称ス」こととなった。韓国校友会はいち早く十月十五日の秋季大会で会名を朝鮮校友会に改称したが、八月一日発行の会報第七号から表紙には朝鮮校友会と記されていた。同号は巻頭に韓国併合の詔書・勅・勅諭・条約・諭告を朝鮮語で掲載しているが、おそらくこれを朝鮮語で頒布する際に翻訳に携わったのが新旧外語の出身者であったと推測される。

韓国併合の結果、朝鮮語は外国語ではないという理由で韓語学科廃止の声が出るようになった。一〇年十二月発行

の「校友会雑誌」(文獻③)でSO生(第三年級在籍の奥山仙三と推測される)は、「東洋禍亂の淵源たりし韓国は我帝国に併合せられ鷄林八道の全部は茲に帝国の版図に入れるは誠に千載の快事」であり、「今後朝鮮開発上当局の我等韓語に通ずる者に待つこと益々急なるべく随つて此際吾人も自己の境遇を自覚し全学科の責任の重且つ大なるを痛切に感ぜずんば非ず候」と述べた後、以下のように述べている。

承る所に拠れば韓国が我日本帝国の一部となれる以上東京外国語学校内に韓語科を置くは頗る其当を得ざるものなりなどかゝる大人なげなき議論を臆面もなく上下する方も之有る由に候……外国語学校内に韓語科を置くの不都合ならば外国の二字を除去せんのみ(傍点・ふりがなは原文)

韓国併合直後から韓語学科廃止論があったことがわかるのだが、SO生は続けて「一千万の新国民」を同化するためには当局が慎重な研究を要すると同時に、一般国民も朝鮮人を「一等国民の一分子として内地人同様に尊敬を払つて」対すべきこと、言語は人力で廃滅できるものではないので、朝鮮人に日本語の使用を強制するのではなく日本人がまず朝鮮語を学ぶようになれば朝鮮人も日本語を学ぶようになると主張し、韓語学科廃止論に反駁している。この韓語学科存続論は、日朝言語同系論には言及していないものの、次にみる主任教授金沢庄三郎の朝鮮語政策論と通じていた。

金沢庄三郎の朝鮮語学科廃止反対論

金沢は一九一〇年十二月の朝鮮視察の際、朝鮮校友会の歓迎会席上で、日本と朝鮮は「往古ニ於テハ同シ国テ同シ統御ヲ受ケ同シ国語ヲ用」いており、「中世以来稍々隔離ノ傾向ヲナシマシタケレドモ今日ハ日鮮合併シテ一國トナ

リマシタカラ互ニ其差異ヲ減却スル必要カ生シマシテ往古ニ復活シマシタノハ誠ニ国家ノ為ニ祝福ニ耐エナイノデアリマス」と述べた後、朝鮮語政策論を展開している。

金沢によると、「或人々ハ学校ノ用語ヲ日本語ノミニニ限リサヘスレハ二三十年ノ後ニハ追々朝鮮語ニ代ツテ半島全土ニ国語ノ通用ヲ見得ルカノ様ニ考ヘテ居ルラシイカ」、「此レハ甚シイ誤解デ」あるという。「既ニ日鮮両語カ併立スル以上ハ日本語ノ奨励ニ全力ヲ尽スヘキハ勿論テアルガ」、「自然ノ天則ニ支配セラル、言語ヲ左右スルコトハデキナイ」のであるから、「家庭語トシテノ朝鮮語」、「社交語トシテノ日本語、此兩者ハ何処マデモ睦ジク相携ヘテ進ミ苟モ嫉妬、反目、偏見等忌マハシキコトカ其間ニ行テハナラ」ない。したがって、「朝鮮語ハ我帝國ノ一方言トシテ帝國語ノ中ニ抱合セラルヘキモノデアル故ニ朝鮮ニ於ケル教育語モ初等教育ハ朝鮮語ヲ本位トシ傍日本語ノ階梯ヲ課シ中等教育デハ日本語ヲ並用シ専門教育ニ至ツテ初メテ日本語本位トスルノガ自然ノ順序デアロウ」というのである（文献④）。

金沢によれば、韓国併合と朝鮮人の日本への同化は必然とした上で、そのためにも朝鮮語をさらに研究し日本語と融合させる必要があり、韓語学科の存続は必要だと主張しているのである。一一年一月、文部省令第三号で韓語学科は朝鮮語学科に改称されたが、それと同時に英語学科・仏語学科などの後に「前項ノ外朝鮮語学科ヲ置ク」となり、朝鮮語学科は外国語学校の一般の学科とはみなされず、外国教師も置かれなくなった。この措置自体は、金沢ら朝鮮語学科教員・生徒の主張に沿うものだったといえよう。

2 朝鮮語学科の廃止

生徒募集停止

ところが、表4、表5にみられるように、朝鮮語学科は一九一六（大正五）年度から志願者・入学者ともになくなり、一八年の四人の卒業生を最後に本科在校生はいなくなる。これは募集停止によるもので、二一、二二年度に速成科聴講生が在籍しているものの、朝鮮語学科は形だけ存在するようになった。なぜ一六年に実質的廃止である募集停止になったのか、現在のところわかっていない。ちなみに石川遼子によれば、主任教授金沢は一七年二月に教授を辞任するが、その理由として金沢自身の文部省の朝鮮語教育政策に対する失望と怒りとともに、東京外国語学校内における金沢排除の動きが推測されるという。

一方韓国併合後の本科志願者は、速成科のみ募集した一三年度を除いて、それ以前と較べて著しく減少したとはいえない。また一一年から一八年までの卒業生四六人のうち卒業後朝鮮で就職したことが確認できる者は三四人で、うち二二人が総督府官僚であるから、卒業生の需要がなくなったとも判断できない。しかし、二二年に朝鮮・満州・中国に出張した長屋順耳は、「朝鮮当局の見る所」によると朝鮮に育つて朝鮮語に堪能な「内地人」が多くなり、また「日本語を内地人の如くあやつる」朝鮮人も多いので、「ことさらに東京外国語学校に朝鮮語部（一九年から学科は部に改称——引用者）を置く」と云ふことに対しては、大に其必要を認めると云ふ訳に行かず之が奨励に出るなど、云ふことは到底望まれさうでない」と述べている。募集再開がなされない理由として、卒業生の需用の問題が挙げられていたことを示唆する発言である。だとすると、長屋のいうように、「東京外国語学校としては世間の需などを度外

視し或外国語を言語其物として研究すべき」だということにならざるをえない。しかし東京外国語学校、とりわけ朝鮮語（韓語）学科がそのような目的で設置されたものでない以上、「それは校内にゼミナールの様な組織が完成してからの話で、差し当りて別問題」（以上、文献⑤）ということになってしまふのである。

朝鮮語部の廃止

一九二七（昭和二）年三月二十八日付文部省令第五号は、東京外国語学校の修業年限を三年から四年に改めるとともに、東京外国語学校規定から「朝鮮語部ヲ削」つた。石川遼子は修業年限改正は二一年の段階で「既定ノ計画」だったことから、朝鮮語部の廃止もその段階で「既定ノ計画」だったのではないかと推測している。また、石川が発掘した同令に関する「改正綱領」は、廃止の理由を「朝鮮ハイフマデモ無ク帝国ノ一部ナルヲ以テ其ノ地方ノ言語ヲ以テ外国語中ニ列スルハ其ノ事既ニ理由無シ」としている。韓国併合直後からあつた論法であつて、なぜ二七年ないし二一年に廃止になったのかを説明するものではない。石川のいうとおり、これ以外の理由は提示できなかったであろう。

一方、二〇年代に日本人植民地官僚に朝鮮語習得の必要がなくなつたわけではなく、反対に総督府は二一年に訓令第二八号「朝鮮総督府及所属職員朝鮮語奨励規定」を發布しており、道庁で朝鮮語講座を実施する道もあつた（文献⑬）。また、朝鮮人の地方官僚・警察官は植民地統治期を通じて増加し続け、とりわけ判任官クラスの官僚と巡査は二〇年以降急増する（文献⑭）。実用的な語学力によつて植民地統治の末端を担う官僚を養成してきた東京外国語学校朝鮮語学科は、その役割を朝鮮総督府に譲つたということにならう。さらに、長屋の「言語其物として研究すべき」という朝鮮語存続の方法は、一九二六年に「東洋研究のセンター」として設置された京城帝国大学の法文学部朝

鮮語朝鮮文学科によって、その実現の可能性が閉ざされていた（文献⑳）。

五 朝鮮語学科の復活と朝鮮語教育

1 朝鮮語学科の復活

東京外国語大学に朝鮮語学科が復活したのは、一九七七（昭和五十二）年四月である。東京外国語学校朝鮮語部が法的に廃止されて五〇年目のことであった。戦後の新制大学では、二五年創立の天理外国語学校朝鮮語部を引き継いだ天理大学外国語学部朝鮮語科のみが朝鮮語専門の学科であった。その後、六三年に大阪外国語大学に朝鮮語学科が設置され、これが戦後国立大学の最初の朝鮮語学科となった。東京外国語大学朝鮮語学科は、これに次ぐ朝鮮語学科であり、同じ年に富山大学人文学部に朝鮮語朝鮮文学コースが設置されている。

七〇年代半ばは、NHKに朝鮮語講座開設を求める市民運動など、朝鮮語学習に対する関心が高まりをみせた時期であり、また当時の永井道雄文部大臣が七五年五月の講演で朝鮮語教育の必要性を主張していた（文献㉑）。本学としても、朝鮮語が学科として存在していないことの不備を指摘する意見が強まりつつあり、一九七五（昭和五十）年十二月の教授会では、坂本忠学長により七七年度の大学整備計画の一つとして朝鮮語教育の実施について検討したい旨の発言があった。もっとも朝鮮語学科の設置に対しては、大学紛争の余波のような形で学内の一部に根強い反対意見があったが、それは朝鮮語学科の設置は、六五年の日韓条約締結の延長線での日本の政府や企業による朝鮮再侵略政策の一環であるというものであった。七六年一月十四日の教授会で坂本学長が朝鮮語学科設立準備委員会の設置

五 朝鮮語学科の復活と朝鮮語教育

表7 東京外国語大学朝鮮語学科(専攻)専任教官一覧(赴任順、数字は年度)

菅野裕臣(言語学、1936年生)	1977講師、1978助教授、1981教授(～1997、現神田外語大学)
長 璋吉(文学、1941年生)	1978講師(～1987、1988神田外語大学、故人)
池川英勝(歴史学、1944年生)	1979講師、1987助教授(～1989、現天理大学)
三枝壽勝(文学、1941年生)	1981講師、1986助教授、1992教授(～現在)
吉田光男(歴史学、1946年生)	1982助手、1985講師、1987助教授(～1993、現東京大学)
徐 尚揆(言語学、1959年生)	1988助手(～1993、現延世大学校)
野間秀樹(言語学、1953年生)	1991講師、1995助教授、1998教授(～現在)
丹羽 泉(宗教学、1956年生)	1992講師、1996助教授(～現在)
伊藤英人(言語学、1961年生)	1993助手、1997講師(～現在)
月脚達彦(歴史学、1962年生)	1995助手、1997講師(～現在)

表8 客員教官一覧

年度	姓 名	年度	姓 名
1977	—	1988	鄭堤文(言語学)
1978	金用淑(文学)	1989	朴良圭(言語学)
1979	金用淑	1990	朴良圭
1980	金泰俊(文学)	1991	安慶華(言語学)
1981	金泰俊	1992	安慶華
1982	成百仁(言語学)・崔鶴根(言語学)	1993	申昌淳(言語学)
1983	崔応九(言語学)	1994	李浩権(言語学)
1984	康仁善(言語学)	1995	李浩権
1985	康仁善	1996	李浩権
1986	金周源(言語学)	1997	李珧鵬(言語学)
1987	金周源	1998	韓在永(言語学)

を提案し、間もなく反対派を含んだ委員が指名された(小澤重男教授、委員長、竹内与之助教授、渡瀬嘉朗・志水速雄・中嶋嶺雄の各助教授)。その後、朝鮮半島の南北分断状況などに基因するいくつかの曲折も経た後、朝鮮語学科は七七年四月に開講の運びとなった。九五年の学部改編によつて、朝鮮語学科は東アジア課程朝鮮語専攻となり、今日にいたっている。

七七年の復活当時、専任教官は九州大学から赴任した菅野裕臣(言語学)一人であったが、その後、表7のとおり専任教官が赴任し、言語・文

表9 朝鮮語学科(専攻)学生数の推移

年度	入学定員	志願者数	入学者数	在学者数	卒業者数
1977	15	39(9)	12(2)	12(2)	1
1978	15	91(23)	12(4)	22(6)	1
1979	15	45(10)	15(3)	38(9)	1
1980	15	62(13)	15(4)	51(13)	6(2)
1981	15	38(14)	14(3)	59(14)	8(4)
1982	15	66(21)	15(3)	64(13)	11(3)
1983	15	60(21)	15(8)	63(18)	16(3)
1984	15	69(28)	15(9)	63(24)	15(4)
1985	15	65(26)	15(6)	65(26)	12(1)
1986	17	97(45)	17(10)	67(33)	12(4)
1987	19	142(49)	19(9)	73(38)	17(10)
1988	20	115(49)	20(14)	74(41)	13(5)
1989	20	74(26)	20(11)	80(46)	18(11)
1990	20	252(100)	20(4)	80(37)	13(7)
1991	35	276(137)	35(20)	99(49)	18(13)
1992	35	209(100)	34(21)	115(57)	19(11)
1993	35	179(74)	35(16)	131(62)	15(4)
1994	35	212(90)	39(19)	155(77)	24(11)
1995	35	191(101)	35(22)	164(87)	42(27)
1996	35	164(85)	36(17)	158(77)	22(13)
1997	35	152(97)	35(18)	167(79)	42(19)
1998	35	185(115)	38(22)	162(82)	

出典：「東京外国語大学概要」各年度。()内の数字は女子、内数。

学・事情各分野に専任スタッフが配置されるようになった。客員教官は、表8のとおり七八年から招聘されており、また八一年からは朝鮮大学の教員が語学・文学、歴史の分野を年度交代で担当している。

学生入学定員は一五人ではじまったが、数度の定員増を繰り返して、一九九八年四月現在、入学定員三五人を有する本学でも中規模の専攻語となっている。各年度の入学・卒業者数は表9のとおりである。

国際交流については、八〇年に韓国延世大学校、九二年に韓国ソウル大学校、九七年にウズベキスタン共和国タシケント国立東洋学大学との間に大学間交流協定を締結し、教官の研究・教育交流、留学生の相互派遣などが続けられている。

2 復活後の朝鮮語教育

朝鮮語教育の再開

五〇年ぶりに復活した朝鮮語学科における朝鮮語教育は、東京外国語学校時代の朝鮮語教育をその内容の側面において継承することなく、新たにはじめられた。一九七七年四月一日学科の開始とともに九州大学文学部から、東京外

国語大学朝鮮語学科の初代教官として着任した菅野裕臣は、一九六二年東京外国語大学モンゴル語学科卒業後、東京教育大学において河野六郎博士に教えを受けた。前章でも述べられているように、実用的な語学力によって植民地統治の末端を担う官僚を養成してきた東京外国語学校朝鮮語学科は二七年にその役割を朝鮮総督府に譲る形で幕を降ろし、「言語其物として」の朝鮮語の研究は二六年に設置された京城帝国大学において推進された。「朝鮮方言学試攷——「缺」語考——」の著者として京城帝国大学における朝鮮語の言語学的研究の進め手であり、朝鮮語の近代言語学研究の確立者小倉進平博士の高弟として戦後に朝鮮研究の学燈を継承した河野六郎博士に師事し、日韓国交回復後初期に韓国留学を果たし彼の地の国語学研究者たちとともに言語研究・調査を行った経験をもつ研究者によって復活後の朝鮮語学科における教育が開始されたことは、日本の朝鮮学の伝統を継承した朝鮮学研究を志向する朝鮮語学科のその後の教育・研究の性格を決定づけた。朝鮮をめぐる政治的・運動論的なものとは一線を画し、学問的に朝鮮に向かい合おうとする姿勢は、菅野裕臣、長璋吉、池川英勝の諸教官が当時の新入生に寄せた文章（それぞれ『東外大ニュース』三三、三六、三九号）その他からも伺えるごとく、その最初期から一貫していた。このことは実用語学の軽視を意味するのではない。七七年当時、朝鮮語の標準語及びソウルの口語の詳細な記述に基づいた市販の入門書、辞書、文法書などは存在せず、既存の朝鮮語教材は多くが日本語との類似に依拠してこれに慣れさせる体裁のものであったため、言語学的な正確さをもつ朝鮮語諸教材の作成が急先務となった。

入門教材の整備

菅野裕臣によって作成され、授業用に用いられた入門教材が製本された冊子の形にまとめられたのは、朝鮮語学科が七九年に行った市民のための朝鮮語公開講座用テキストとしてであった。このテキストが母胎となり、大幅な増補

が加えられて『朝鮮語の入門』（菅野裕臣、白水社、一九八一年）が出版された。これは今日にいたるまで朝鮮語専攻の基本テキストとして使用されており、東京外国語大学における朝鮮語教育の特徴はすべて該書に起因すると言っても過言ではないと考えられるので、これについてやや詳しくふれたい。

第一に「語基」の概念の導入が挙げられる。朝鮮語の用言には、日本語五段活用動詞における未然形、連用形といった活用形と同じように語幹形成母音の交替による活用が認められる。朝鮮語の用言に日本語国文法の活用形に相当するものを認めたのは中期朝鮮語文法の最初の研究書である前田恭作（三章に既出）『龍歌古語箋』（一九二四年）が嚆矢であり、これは前出河野六郎博士によって「語基」として言語学的に定義され、日本の朝鮮語研究、特にその史的研究において使用されてきた。『朝鮮語の入門』は日本における朝鮮語研究の伝統を踏まえ、「語基」の概念を朝鮮語教育に導入することによって極めて複雑な朝鮮語用言の構造を変格活用も含めて截然と明示した。一方朝鮮本国の国語学では、南北ともに用言の「語基」による活用を認めていない。天理大学、大阪外国語大学の朝鮮語教育においても「語基」は導入されていなかった。日本の朝鮮語研究の達成の一つが教育に導入されたことになる。

第二に正書法・正音法規則の網羅が挙げられる。韓国の正書法により、ソウルの標準的な発音（八母音体系）に依拠し、初学者にとって厄介な文字と発音の規則が五一項目にわたって段階的に与えられ、かつ南北の差も詳細に示された。第三に書き言葉と話し言葉の違いについての初めての詳細な言及を挙げる。朝鮮語は書き言葉と話し言葉の差が著しいが、それ以前の朝鮮語教材は主として書き言葉中心であり、話し言葉は単なる縮約ないし省略として済まされるか全く言及されないかであった。該書は両者のレベルの違いと対応関係を明示した最初の教材であった。なお該書をはじめとして、東京外国語大学朝鮮語学科では、先に書き言葉形を学び、しかるのちに対応する話し言葉形を順次学ぶという学習の順序が一貫して維持された。このことに変更が加えられるのは後述するように九八年以降であ

る。

入門教材に次いで読本、辞書その他の教材作りが急がれたが、これらは文部省教育方法等改善プロジェクトによる東京外国語大学語学教育研究協議会事業の形で作成されていった。最初に一・二年生用の読本として一九八〇年に『初級朝鮮語読本』（二七八ページ）が作られた。南北の正書法によるテキストを採り、巻末に四種の地図、田川孝三作成及び大韓民国文教部作成の年表が付された。戦後の日本での朝鮮語読本の作成は天理大学朝鮮語学科研究室編『朝鮮語読本』に次ぐものである。翌八一年『朝鮮語文法便覧』が作られた。意味用法の記述はさておき、造語接辞をも含めてとりあえず多様な文法的形式を網羅しようとしてなされた暫定的な試みである。手書きの浄書作業は学科の学生たちの参加によってなされた。八二年には『朝鮮漢字音便覧』（三五九ページ）が作成された。「朝鮮語学科の学生諸君が、ある程度中国語の知識を持つことの必要性を考慮して」（『朝鮮漢字音便覧』あとがき）中国音が付されており、またこの時期おもに二年生を対象に初歩的な中国語が教えられていた。八四・八五年には『朝鮮語慣用語集』上・下（三二四ページ・二五五ページ）が作られた。朝鮮語の学習がある程度進んで来ると悩まされることとなる学習上の困難が慣用的な表現であり、この困難を軽減するために企図された対訳慣用語集である。

朝鮮語作文教材、会話教材の作成が待たれたが、朝鮮語教育における初級、中級の画定、文法的な事項を盛り込んだ学習辞典の整備等がこれに先行ないし並行して行われる必要があった。八五年五月から八七年四月にかけて発行された月刊雑誌『基礎ハングル』（菅野裕臣編集、三修社）は初級・中級の語学講座の他に文学・歴史等のコーナーも備えた朝鮮語教育雑誌で、東京外国語大学の三枝壽勝・長璋吉・吉田光男・康仁善・金周源（カインソン、キムユウソ）の諸教官が執筆に参加している。この雑誌の「ハングル講座」部分が八七年十一月「朝鮮語を学ぼう」（菅野裕臣監修・朝鮮語学研究会編、三修社）として出版された。これによって朝鮮語のごく初級の段階で与えられるべき事項の試案が示され、つとに授

業用に作成されていた作文教材を「朝鮮語を学ぼう」の事項配列に倣って組み直し、文字・発音・正書法を新たに加えて、八七年度東京外国語大学語学教育研究協議会事業の一環として「朝鮮語初級教材」Iが作成された。かねての課題であった会話教材も「朝鮮語を学ぼう」の事項配列に従って徐尙揆^{ソウギョク}教官によって作成された「朝鮮語初級教材」II（一九八八年度同協議会）として結実した。同書の「はじめに」に「生き生きとはしているがむずかしい会話から入るとというのが最近の外国語教授法の流行だが、われわれは文体の差の著しい朝鮮語の場合、書きことばから話しことばへと段階的に進む方が、時間はかかるが、結局は学習者の実力をつけることになると信じている」とあるように書き言葉を基礎にするという方針が貫かれている。両書はほどなく加筆され市販教材として出版され、「朝鮮語入門」、「朝鮮語を学ぼう」とあわせて一年生初級教材として使用され続けた。

総合的朝鮮語学習辞典は長らく待たれていたが、八八年に「コスモス朝和辞典」（白水社）が出版された。菅野裕臣を中心に編まれたこの辞書は、東京外国語大学で教授されてきた文法に基づき、分離用言、受身形、副詞、可算名詞の場合の名数詞、アスペクト形といった文法事項を盛り込み、発音と変化形を示した最初の朝鮮語活用辞典である。「コスモス朝和辞典」の出現により語基の考え方に基づいた朝鮮語入門教材群が一応の完成をみるにいたった。朝鮮語学科によって作成されたその他の教材は左に示したごとくである。

朝鮮近代文学史資料	三二五ページ	八六年度
中期朝鮮語資料選	三八六ページ	八六年度
朝鮮近代詩集	二四六ページ	八七年度
朝鮮語中級読本	四一二ページ	八九年度

朝鮮語初級読本	三五一ページ	八九年度
朝鮮語視聴覚教材	二二九ページ	九〇年度
朝鮮語文体範例読本	三七〇ページ	九一年度
朝鮮語分類基礎語彙集	三一二ページ	九七年度

朝鮮語学科における朝鮮語教育

東京外国語大学朝鮮語学科の朝鮮語教育を特徴づけてきたものとして言語教官による専攻語教育の管理統括、読解重視の二点を挙げる事ができる。

「朝鮮語の入門」の稿が一年生の授業に使用されるに際し、著者による手書きの「朝鮮語の入門」教師のための手引」が作られた。あわせて一年生のすべての専攻語授業が言語教官（菅野裕臣、のちに野間秀樹）によつて管理・統括された。そのための回覧ノートが作られ、各教官に各教材の進度、試験の指示などが与えられる。一年生の専攻語授業には言語・文学の日本人教官と外国人教官が当たり、二年生のそれは学科の全教官がこれを担当する。言語教官による一年生一学期専攻語の進度管理は現在も継承されている。教材の整備に伴い、使用教材、進度などはもちろん年を追つて若干変遷しているが、「朝鮮語の入門」を基本教材とすることに変化はない。文字と発音に関する五〇程度の項目をほぼ五月初旬までに終え、基本的な文法事項（助詞、用言の語基活用、終止形・連体形・接統形等の代表的語尾）及びそれらを含む論説文を一年生一学期夏休み以前に終了し、二学期以降は主として講読に入る。各教官ごとの年数回の定期試験、年一五回程度の単語試験が課せられる。一・二年生を通じて計三、五〇〇語程の単語試験が課せられている。総じて進度は極めて速く、学生には入学と同時に日々膨大な学習が要求される。留年する学生も決

して少くない。

一年生九月以降二年生にかけて、日本人教官が講読を、外国人教官が会話を担当する。三年生以降それぞれの専攻分野に関する諸文献を読解する力を担保するためにも、ある意味では他の三技能の訓練を多少犠牲にしても、一・二年での文法訳読方式による講読を通じての読解力養成に力が入られてきた。読解力の養成こそが他の三技能の基礎になるという考えがこの教育方法を支えてきた。外国人教官の会話授業の教材も前述のように書き言葉の基礎の上で会話を養う形式を採っている。復活以後の朝鮮語学科は、文法規則の段階的な積み重ねによって朝鮮語を正確に読み書きしうる学生の養成に努めてきたと言える。この結果、三年次以降専修専門科目での朝鮮語の論文、著作の読解等にさほどの困難を来たすことはなく、二年次の終わりには自らの考えを朝鮮語で綴ることもかなりの程度出来るようになる。しかしながら、語学学習における体的側面、発音やイントネーションの訓練等は学生個人の自助努力に多くが委ねられてきた。読解力を落とすことなく、話し、聞き能力を向上させることが、長年の課題であり、また学生側からの要望でもあった。九〇年代以降外国人教官によるクラス分け授業、文学教官によるビデオを用いた授業など漸次改善が重ねられ、九八年度以降、前期専攻語授業において、新しい入門教材の導入、話し言葉形の早期導入、ディクテーションの増加、表現させることに主眼をおいた授業など、文法訳読中心主義からの離脱が試みられはじめた。

後期授業

朝鮮語学科第一期入学者が三年次に進級した七九年の後期科目は次のとおりである。

朝鮮語演習（中期朝鮮語演習）／菅野裕臣、朝鮮語演習（朝鮮現代小説演習）／長璋吉、朝鮮語演習（李朝小説演習）／金用淑、朝鮮語演習（朝鮮近代史料演習）／池川英勝、朝鮮語学概論（現代朝鮮語文法概論）／菅野裕臣、朝鮮文学概論（近代朝鮮文学史概論）／長璋吉、朝鮮文学概論（韓国国文学概論）／金用淑、朝鮮史（李朝史概説）／田川孝三、朝鮮史（朝鮮近代史概説）／池川英勝、朝鮮事情概説（朝鮮半島南北の経済）／小牧輝夫、朝鮮事情概説（在日朝鮮人の現状と当面する問題）／佐藤勝巳、朝鮮事情特殊研究（現代朝鮮の政治）／小此木政夫。

二年後八一年の後期科目は次の通りである。

朝鮮語演習（中期朝鮮語文法研究）／志部昭平、朝鮮語演習（朝鮮近代小説演習）／長璋吉、朝鮮語演習（朝鮮近代史料演習）／池川英勝、朝鮮語演習（朝鮮小説演習）／三枝壽勝、朝鮮語演習（韓国語作文演習）／金泰俊、朝鮮語学概論（現代朝鮮語文法概論）／菅野裕臣、朝鮮文学概論（韓国現代文学史概説）／長璋吉、朝鮮文学概論（韓国国文学概論）／金泰俊、朝鮮語学特殊研究（老乞大研究）／菅野裕臣、朝鮮語学特殊研究（解放前後における朝鮮文学の諸状況）／三枝壽勝、朝鮮語学特殊研究（李朝小説研究）／金泰俊、朝鮮語学特殊研究（春香伝研究）／金泰俊、朝鮮史（朝鮮近代史概説）／池川英勝、朝鮮史（朝鮮古代史）／村山正雄、朝鮮史（李氏朝鮮時代史の概説と各論）／平木實、朝鮮事情概説（韓国経済事情）／野副伸一、朝鮮事情概説（在日朝鮮人の現状と当面する問題）／佐藤勝巳、朝鮮事情特殊研究（近世日朝通交貿易史）／田代和生、朝鮮事情特殊研究（近代日朝交渉史）／姜東鎮、朝鮮事情特殊研究（近代朝鮮経済史）／高秉雲。

この八一年には朝鮮文学の三枝壽勝が、翌八二年には朝鮮史の吉田光男が着任し、言語一、文学二、歴史二名の専任教官による後期授業の体制が整えられた。八一年以降、朝鮮大学からの非常勤講師による授業が設けられ朝鮮民主主義人民共和国の言語・文学及び朝鮮史の講義が一年交代でもたれ現在にいたる。この年から非常勤講師・故志部昭平による中期朝鮮語の講義が八〇年代を通して開講された。朝鮮語・中国語・満洲語・蒙古語の対訳資料「老乞大」の講義は菅野裕臣の退官まで途中に断続した時期を含みつつも継続され、朝鮮語学科の学生のみならず、中国語学

科・モンゴル語学科の学生・院生も多くこれに参加した。

その後、表7に見られるごとく教官の赴任・移動があり、それぞれの専門とするところの授業科目が後期授業で開講され現在にいたる。その間、学科再開の翌年から八七年まで学科専任教官として朝鮮語教育に当たって来た長璋吉が八八年逝去した。生硬な言葉ばかりの朝鮮関係の書籍の中で、韓国に暮らす人々の言葉の息づかいの端々までもが魅力的に語られた長璋吉著「わたしの朝鮮語小辞典」(北洋社、一九七五年、河出書房文庫版、一九八五年)は、これを読んで朝鮮語の学習を志す人々を今も生み出している。

九八年度後期科目は次の通りである。

アジア言語研究Ⅰ(現代朝鮮語文法論)／野間秀樹、朝鮮語学研究／野間秀樹、朝鮮語講読／野間秀樹、朝鮮言語学(卒業)／野間秀樹、現代朝鮮語文法論／韓在永、統辞論／韓在永、書誌学的朝鮮語学研究／藤本幸夫、日韓対照言語研究／浜之上幸、現代朝鮮語アスペクト論／浜之上幸、現代朝鮮語口語研究／伊藤英人、中期朝鮮語文献講読／伊藤英人、朝鮮語学(卒業)／伊藤英人、アジア文学Ⅰ(朝鮮の現代文学)／三枝壽勝、朝鮮の現代文学演習／三枝壽勝、朝鮮の近代文学(卒業)／三枝壽勝、朝鮮の近代小説／芹川哲世、アジア地域研究Ⅰ(朝鮮の宗教と社会)／丹羽泉、朝鮮地域研究演習／丹羽泉、朝鮮の社会と文化(卒業)／丹羽泉、近代朝鮮の国家と社会／月脚達彦、朝鮮近代史(演習)／月脚達彦、朝鮮史研究(卒業)／月脚達彦、地域専門科目(朝鮮民主主義人民共和国の言語政策)／朴宰秀、朝鮮民主主義人民共和国の文学／金学烈、現代韓国社会論／小針進、朝鮮半島南北の経済発展／小牧輝夫、朝鮮の文化と社会Ⅱ／丹羽泉、朝鮮近世史・近代史概説／月脚達彦

表8の客員教官一覧に見るごとく初期を除いて、言語学(朝鮮語学)を専門とする研究者が前後期の授業を担当してきた。日本語と朝鮮語の類型論的類似のため、日本語話者への朝鮮語の教授は、常に対照言語学的であらざるをえ

ず、日本語の干渉による誤用例の分析など今後有効に活用しうる経験が蓄積された。

後期授業の近年の著しい変化は、多くの韓国人留學生の授業への参加である。大学間交流協定校からの留學生はことに短期留学制度によって増加し、学部・大学院を併わせ一〇名程度が朝鮮語専攻に在籍している。彼らは日本語を解さないため、近年の朝鮮語専攻後期授業のいくつかは朝鮮語で行わざるをえなくなっている。また三大講座制への移行による専攻語間の壁の撤廃は日本課程在籍の韓国人留學生の朝鮮語専攻後期授業への参加を促した。このため、韓国の大学で自国の言語・文学を学び日本語を解さないが日本の朝鮮研究の方法論を学ぶ目的をもった留學生、日本語を解しこれを専攻するが自国の言語・文学等について専門的に学んだことのない留學生、および朝鮮語専攻の留學生という三種の留學生を対象に、朝鮮語で授業を行い、朝鮮語専攻の留學生の発表も朝鮮語で行ってもらうという状況が現出している。読み書きと併わせ口頭発表能力の涵養が今後ますます要請される。

文 献

- ① 本田存「韓語科卒業生近況」「校友会雑誌」(一九〇六年五月) ② 柳必根「勸学」「東京外国語学校韓国校友会会報」(一九〇八年九月) ③ S O 生「韓語科便り」「校友会会報」(一九一〇年十二月) ④ 金沢庄三郎「校友会席上ノ談話(朝鮮に於ける国語)」「東京外国語学校朝鮮校友会会報」八(一九一〇年十二月) ⑤ 長屋順耳「鮮、満、支、出張所感」「東京外国語学校同窓会々報」四(一九二二年十一月) ⑥ 上田順一郎「三十年の回顧」「東京外語同窓会会報」再興二(一九三三年三月) ⑦ 大曲美太郎「釜山港日本人居留地に於ける朝鮮語教育」「青丘学叢」二四(一九三六年五月) ⑧ 教育史編纂委員会「明治以降教育制度発達史」一(龍吟社、一九三八年) ⑨ 田保橋潔「近代日鮮関係の研究」(朝鮮総督府、一九四〇年) ⑩ 鮎貝房之進談「回顧談」「書物同好会会報」一七(一九四二年九月) ⑪ 大友歌次「校

友思ひ出草」『書物同好会会報』一七（一九四二年九月）⑫増田道義「朝鮮近代教育の創始者に就いて」（二）『朝鮮』三三四（一九四三年二月）⑬李光麟「開化僧李東仁」『開化党研究』（一潮閣、ソウル、一九七三年）⑭具良根「明治日本の韓語教育と韓国への留学生派遣」『韓』五九（一九七六年十二月）⑮梶井陟「朝鮮語を考える」（龍溪書舎、一九八〇年）⑯李光麟「李樹廷の人物とその活動」『韓国開化史研究』（一潮閣、ソウル、一九八一年改訂版）⑰李光麟「旧韓末の官立外国語学校」前掲「韓国開化史研究」⑱大村益夫「大学における朝鮮語教育の現状」『季刊三千里』三八（一九八四年五月）⑲李光麟「開化初期韓国人の日本留学」『韓国開化史の諸問題』（一潮閣、ソウル、一九八六年）⑳稲葉継雄「鮎貝房之進・与謝野鉄幹と乙未義塾」『韓』一〇八（一九八八年二月）㉑橋谷弘「一九三〇・四〇年代の朝鮮社会の性格をめぐる」『朝鮮史研究会論文集』二七（一九九〇年三月）㉒米谷均「対馬藩の朝鮮語通詞と雨森芳洲」『海事史研究』四八（一九九一年六月）㉓田代和生「対馬藩の朝鮮語通詞」『史学』六〇―四（一九九一年七月）㉔琴秉洞「金玉均と日本」（緑陰書房、一九九一年）㉕李光麟「卓挺埴論」『開化期研究』（一潮閣、ソウル、一九九四年）㉖東京外国語大学百年誌編纂委員会編「東京外国語大学沿革略史」（東京外国語大学、一九九七年）㉗石川遼子「『地と民と語』の相剋―金沢庄三郎と東京外国語学校朝鮮語学科」『朝鮮史研究会論文集』三五（一九九七年十月）

史 料

- ①『朝鮮事務書』（外務省外交史料館所蔵、一―一―二、三―一―三）
- ②『明治九年朝鮮国通信使金綺秀来朝一件』（外務省外交史料館所蔵、一―一―二、三―一―〇）
- ③『朝鮮語学生養成方東京外国語学校へ囑託一件』（外務省外交史料館所蔵、六―一―一七、七）

五 朝鮮語学科の復活と朝鮮語教育

- ④ 『露清朝三ヶ国語学生養成及採用法ニ関シ文部省ヨリ協議一件』(外務省外交史料館所蔵、三―一〇―二、四)
- ⑤ 『明治十四年朝鮮国視察員朴正陽来航関係』(外務省外交史料館所蔵、一―一―二、三―一七)
- ⑥ 国史編纂委員会編『修信使記録』(探求堂、ソウル、一九七一年)
- ⑦ 『旧韓国外交文書』「日案」(高麗大学校附属亜細亞問題研究所、ソウル、一九六五―七〇年)